

「読む會テキスト：補」

2頁内容は「本：テキストP9」と關聯。

3頁内容は「本：テキストP12」と關聯。

4頁内容は恆存の作家（人間）觀の基調。

（以下、テキスト活用に際しての分類及び略號化）…恒存の「二元論」的捉へ方。

（参考評論：『近代の宿命』『醒めて踊れ』他）

「支配 = 被支配の自己」・集團的自我・「九十九匹」・實生活・政治…………A
神に從属する自己・個人の純粹性・個人的自我・「一匹」・藝術・文學…………B
全體・絶對・神…………C
場（場面）・自己完成・自己全體化・自己主人公化・個人主義化…………C€35
詩神（自己への肯定因。「C€3自己完成」の後楯・自家撞着として）…………C2
關係・宿命・神意・天命・秩序・文化…………D 1
自己劇化・演戯・自由意志・自己主張・信仰…………D 2
實在感・必然感・全體感・生き甲斐・充實感…………D 3
言葉と話し手との間の距離（把握手段：フレイジング・So called）…………E
注：（Eの至長化 = D1の至長化 = 適應正常）
言葉…………F

参考文：「すすんで他とかかはりあひ、他を支配したり他に支配されたりすることをとほして自己を生かさうとする集團的自我（A）」と「おのれを完成せしめんとする個人的自我（B）」
(参照：『アポカリプス』：まへがき)

(日本の精神主義構圖)

$A \rightarrow B \rightarrow C'' = C2$ (西歐概念の後楯化現象)

C2:後楯・護符(西歐概念 = 上位概念)

絶對的自己肯定
C''

A

B

「進歩・自由」(西歐的概念・新漢語)への適應異常…教育・西歐自然主義文學・戀愛等に對してと同一的「適應異常」現象と言ふ事では、そして、その原因として擧げられる事は以下の日本人の精神構造の特質である。

* 彼我の差を辨へず「自他未分の神道的生活態度で何にでもべたべた引つ付く」。それが禍し、實證精神によつての「テキストP 8圖」化(「神に型どれる人間の概念の探究」)が叶はず、「テキストP 9圖」に停留してしまふ。その結果「西歐的概念」は、「絶對的自己肯定」の爲の肯定因、即ち「C2:護符・後楯」としての上位概念(世界・社會・階級、大思想)へと變質しまふ。以下參照。(參照:左欄圖)

(拙發表文:『日本の知識階級』より抜粋)

恆存は、「日本の知識階級は言はば絶對的自己肯定者(C''自己主人公化)として終始してきた」と看破し、「私小説家・近代日本知識人、その典型としての清水幾太郎」の三者を、いづれもパターンは「テキストP 9」の「日本精神主義構圖」だと言つてゐる。即ち以下の様に。

「現實(A)的不滿 B:逃げ處としての個人的自我概念 C''自己主人公化(自己完成:絶對的自己肯定) 「詩神・護符・後ろ楯の思想:C2」 自己満足・自己正當化(似非生き甲斐・似非實在感)」(參照:左欄圖)

そして、彼等「絶對的自己肯定者はあらゆるものを自己の手中に收めようとして(權力慾)、その結果、自己の不滿(A:現實的不滿)を處理する能力だけを失つた人間である。(中略)不滿の原因是現實といふ客觀的對象のうちにのみあるのではないのに、彼等はそれをそこ(A的不滿)にのみ見出さうとする。いや、さうする以外に能力も無く、方法も知らぬのであります」(『日本の知識階級』全5P 369)。と、上記三者を當該評論で鋭く指摘してゐるのである。

そして彼等は「絶對的自己肯定」の爲に、その肯定因として「C2:護符・後楯」を上位概念「世界・社會・階級、大思想」に求めようとする。何故ならば、西歐近代が否定因としての神を背景に持つに對して、前近代日本はそれを持たない。故に後楯による自己欺瞞が可能になるのである、と恆存は指摘するのである。

「大事な事は物(F・言葉・圖)を生き物として附合ふ事である」(「人間國寶序」より)

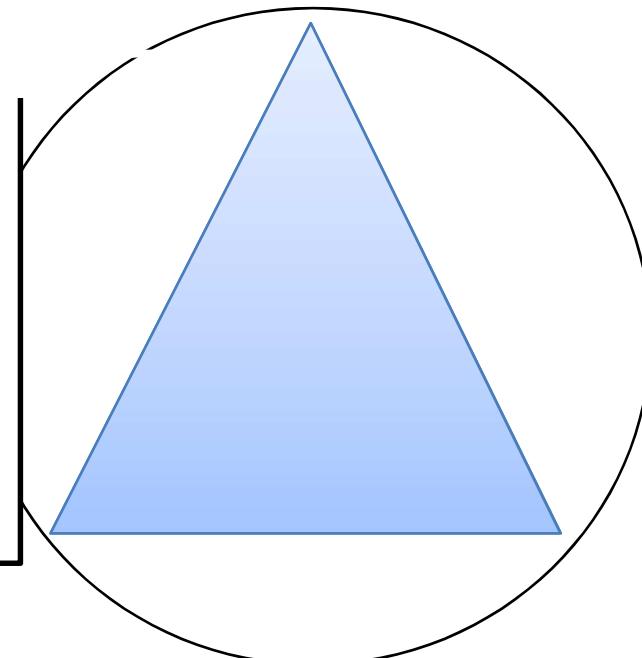
「物(左圖)」と「生き物として附合ふ(右圖)」との違い。

重要なのは、それが出来る爲には次の内容が必要となると言ふ事。…「言葉・物」との附合ひ方、扱ひ方。右圖で言ふ「E」即ち「フレイジング」「So called」「型・仕来り・生き方・様式」の用ひ方の適不適で、場との関係(D 1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反対に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。

* 以下圖は人間(圖)が物(F・言葉・圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」

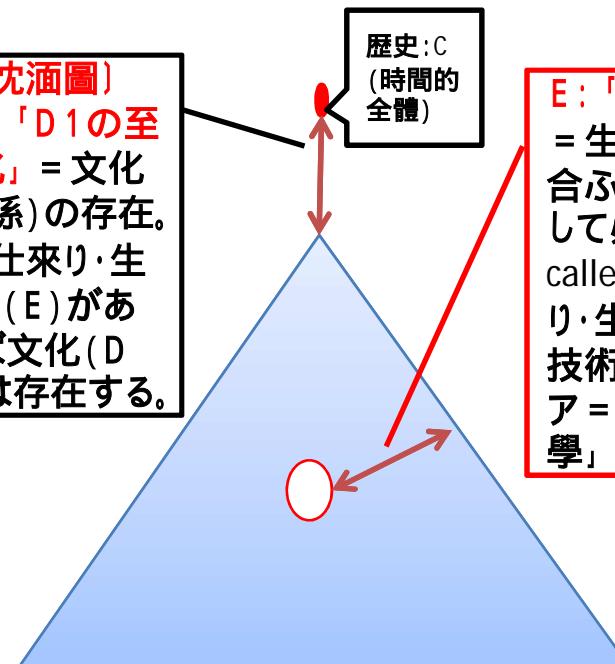
(沈湎圖)
D 1の喪失
はEの喪失。即ち文
化の喪失
= 型の喪失
= 物・言
葉との附
合ひ方の
喪失…
「野蠻」
文明



* 下圖は、「物(F・圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至長化 = 自分と言葉(物)との距離の測定」が出來てゐる状態。

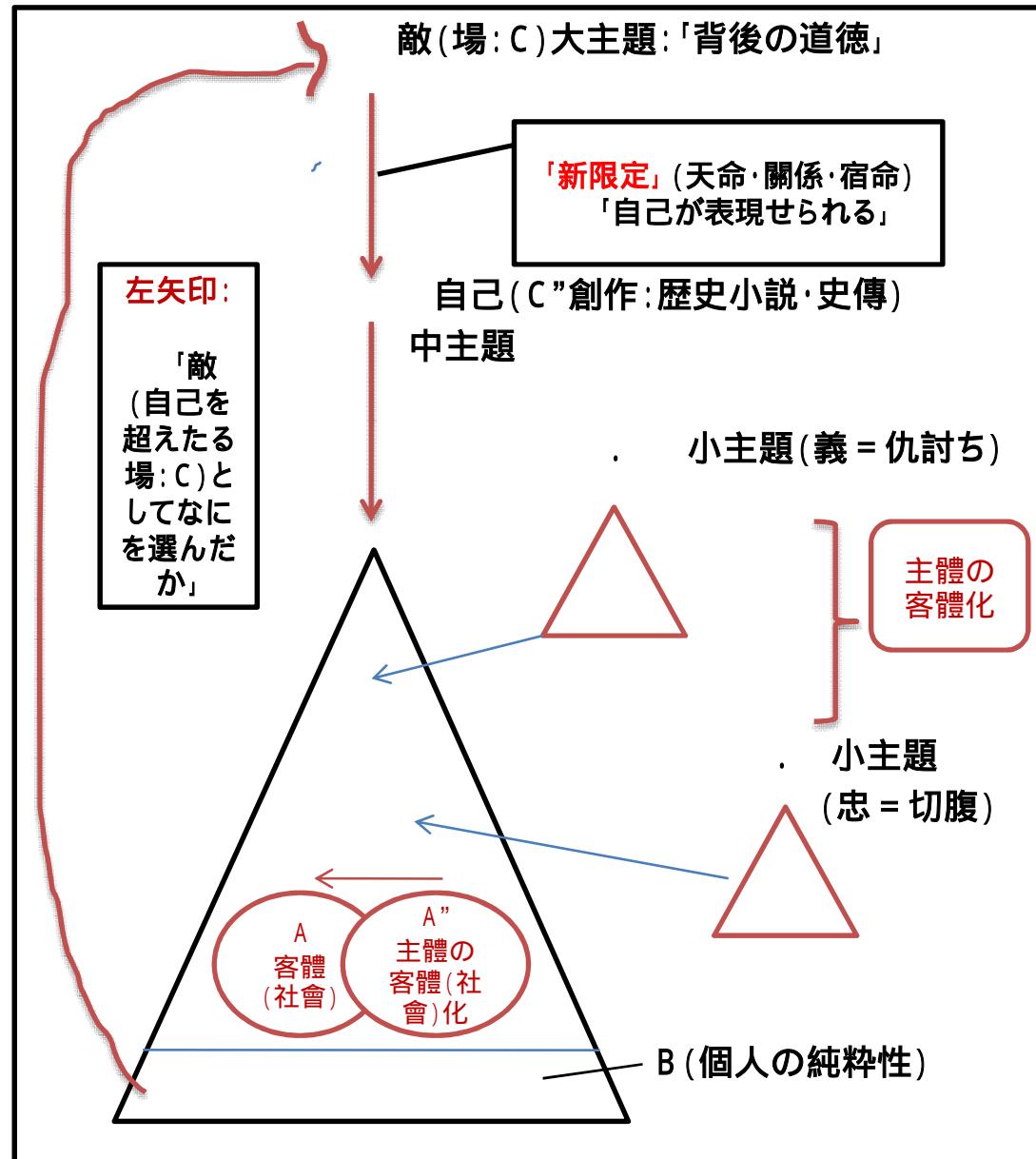
* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P 391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

(非沈湎圖)
D 1: 「D 1の至長化」 = 文化(關係)の存在。
型・仕来り・生き方(E)があれば文化(D 1)は存在する。



E: 「Eの至長化」 = 生き物として附合ふ。その手段として必要な「So called」「型・仕来り・生き方・様式・技術」「ソフトウェア = 精神の政治學」

(本文9頁) :敵(自己を超えたる場C:例「天」) 關係・宿命(D1例:天命) 自己(C")の活動(例:鷗外「歴史小説」)…以下構圖の、「完成せる統一體としての人格」論(テキストP10圖)、及び演劇論(テキストP11圖)との相似形に留意されたし。即ち の流れに。



*左圖を詳細に記すと、鷗外の場合は以下の通りとなる(拙文「口邊に苦笑」参照)。

大主題(C)の發見「背後の道徳」 天命・宿命・新限定 中主題(C")文學:歴史小説・史傳の創作)

小主題:客體化(義=仇討ち =『護持院原の敵討』・忠=切腹 =『堺事件』・孝=『高瀬舟』・全般 =『渋江抽斎』等々)の創作と言う能動となる。

*それぞれの大主題(C)の發見 中主題(C")文學:歴史小説)の創造 小主題

・漱石の場合は、

大主題(C):「背後の道徳」 天命・宿命・新限定 中主題C」「自己本位」(彼我の差に踏み留まる?) 小主題(「私の個人主義」・各小説他)。

・ルソーの場合は、

大主題(C):「神」 神意・宿命・新限定 中主題(C)"告白録" 小主題(神・C:「思想に自己を賭けた」描写 P414下)

・フローベールの場合は、

大主題(C):夢想(理想人間像) 神意・宿命・新限定 中主題(C")近代自我(個人主義)否定 小主題(「ボヴァリー夫人」他。(神・C:夢想「思想に自己を賭けた」描写。しかし、夢想は作品には登場しない))

・ハムレットの場合は、

大主題:先王の亡靈(C:王権神授) 君命・宿命・新限定(王権奪還「關節を治す」) 中主題(C":復讐 小主題(各章:「めまぐるしく行動しながら、意識の世界では(敵・新限定から)一步も動かず」))

・二葉亭の場合は、

大主題(C):「國家」 國命・宿命・新限定 中主題(C") 國士として活動 小主題(洋行)

・恆存の場合は、

大主題(C:絶対・全體) 關係・宿命・新限定(誠實) 中主題(C)"關係と言ふ眞實を生かす" フイクション: 小主題(文學評論・演劇・政治論)

・チエーホフの場合は、

大主題(C):「空家(神不在)」にたへる 宿命・新限定(「無執着」「底意のない眼」) 中主題(C")近代自我(個人主義)が自己解釈「獨り合點」する意識(D3)を「在るがままに描く」 小主題(各戯曲他)